

令和元年度 金光藤蔭高等学校 学校評価報告書

1 めざす学校像

**建学精神** : 我々が天地の大徳によって生かされ、家族をはじめ多くの人々の祈りによって育てられていることの自覚と感謝の念から発して、その自分を大切に、将来世のお役に立つ人間となって、世界真の平和達成と文化の発展のために貢献し、そこに生甲斐と喜びを見出す人でありたいという念願に立って、教育の徹底を期する。

**教育方針** : 「学理求道」  
確かな学問と豊かな人格を備え、大局観に基づく課題認識を持って、社会に有用たる生き方を求める人材を育成する。その人材を輩出することによって本校としての社会的責任を果たす。

**組織目標** : ① 生徒一人ひとりを大切に教育内容と進路保障で応える学校 ⇒教育  
② 社会の変化や時代の要請に応じて、常に改革・改善し続ける学校 ⇒経営  
③ 教職員一人ひとりの高い職業意識と組織力で業務遂行する学校 ⇒組織

**スローガン** : 「学びの場で、夢にチャレンジしよう！」

2 中期的目標

- 1 法人理念と教育目標の遡求
  - (1) 法人理念の徹底
- 2 教育内容の充実改善
  - (1) コース内容の充実・検証
  - (2) 基本的学力の向上
  - (3) 生徒指導の充実
  - (4) 進路指導の充実
- 3 学校組織活動の充実発展
  - (1) 学校組織の活性化
  - (2) 組織と業務を通じた人材育成
- 4 広報募集活動の充実強化
  - (1) 広報募集の強化
- 5 創立100周年に向けて
  - (1) 問題解決型・未来志向型の学校風土の醸成

【自己評価アンケートの結果と分析・学校評価委員会からの意見】

**自己評価アンケートの結果と分析**

**【アンケート】** ○生徒 <令和2年2月実施>  
授業内容を中心に学校生活全般について全校生徒に調査した。(16項目)

○教職員 <令和2年4月実施>  
授業評価・生活指導・その他教育活動や学校改革(コース改編等)の成果について検証した。(16項目)

**【分析】** ○生徒アンケートではほとんどの項目で約80%以上の生徒が肯定的な反応を示している。  
○教職員による自己評価では、「6コースのそれぞれが特色を生かした学習活動を実践した」と大半の教職員が実感している。また「校内研修や具体的な事例をもとにした問題解決型の業務を通して、教師力向上に取り組んでいるか」との項目でも80%を超える教職員が認識している。  
今後も一人一人の生徒に寄り添った、丁寧な教科指導、生活指導を継続していきたい。

学校評価委員会からの意見

学校評価委員 ①学識経験者：須田正信氏（大阪教育大学教授） ②学校近隣防犯委員：新居見英夫氏 ③本校PTA会長：巳波千夏氏

○教育内容の充実改善について

- (1) コース内容の充実・検証  
6つのコースを安定・充実される取り組みに努めている。教職員アンケートからは、「6コースのそれぞれが特色を生かした学習活動を実践した」との自己評価をしていることからその成果が伺える。令和2年度に向けてコース内容の変更や改善を図り、さらなる成果を期待したい。
- (2) 基本的学力の向上  
アンケートで「基礎学力がついてきた」と答えた生徒が84%、また「授業はわかりやすく、工夫がされている」と答えた生徒も89%で、昨年度より生徒の満足度は上がっている。これらの報告から基礎的学力向上への取り組みの成果が伺える。「特別講習」などの取り組みの成果についても一層の努力を期待したい。
- (3) 生徒指導の充実  
転退学者の約64%が不登校を含む学校生活学業不適応や進路変更を余儀なくされる生徒であることから、学校としてその対応が迫られていることが伺える。しかし、「生徒の心身の悩みに先生が丁寧に対応している」に90%の生徒が肯定的に回答していることは大きな成果としてとらえている。今後も引き続き支援を必要とする生徒に対してカウンセリングマインドを持って教師が対応することを望む。
- (4) 進路指導の充実  
全体の進学率は76%で、大学進学が若干減少し、専門学校進学が若干増加している傾向がみられるが、総じて進路指導に力を入れていることが伺える。引き続き家庭との連携を深め、本人志望の進路実現に向けて、粘り強い指導を継続していく事が求められる。

○学校組織について

- (1) 学校組織の活性化  
生徒たちの学力向上や学校全体の活性化を促す教員の選考・任用を行うことでその成果がみられる。教職員の適性・能力に応じた校内人事や校務分掌についてもアンケート結果から78%の教職員が肯定的評価をしていることから、学校経営における組織マネジメントが機能していることが伺える。
- (2) 組織と業務を通じた人材育成  
分掌長、副分掌長を配置し、教頭補佐を学校運営の担い手として育成しているなど、組織マネジメントに努めていることが伺える。

○広報活動について

- (1) 広報活動の強化  
中学生・保護者対象のオープンスクールや入試説明会、中学校教員や塾向けの入試説明会を開催し、各コースの体験授業も工夫を凝らして参加者の増加に努めている。「エンカレッジコース」では、広く「学びなおし」を必要とする生徒へのニーズに対応していた。また、ホームページでの刷新に努力している。

○その他

- (1) 問題解決型、未来志向型の学校風土の醸成  
校長はじめ教職員が魅力ある学校づくりに尽力していることが伺える。

3 本年度の取組内容及び自己評価

目標 中期的	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
法人理念と教育目標の遡求	(1)法人理念の徹底 ア 建学精神の遡求 ア 心の教育を意識 イ 本部参拝・本校感謝祭の充実	(1)法人理念の徹底 ア 建学精神を全ての教育活動の基として、「心の教育」を意識して、生徒・保護者への啓発に努める。 ア 全人教育という観点から、「社会的自我」と「生きていく力」を育成することに努める。 イ 学校行事として毎年実施の本部参拝と本校感謝祭の充実を目指す。	ア 式・行事での講話、学年・学級での指導、配付物等を通じて、金光教の教えをわかりやすく説明する。 ア 天地・人・物への感謝を抱き、社会のお役にたつという「心の教育」を行う。 イ 本部参拝については、宗教情操教育の観点からも、入学当初の1年生を対象に移行を検討する。	ア 全校生徒の84%が心の教育を実感していると認識している。式や行事の他、学年集会や日々のホームルームでの指導が生徒に浸透しているようである。また昼休みや放課後、神徳堂(お広前)を訪れる生徒も多く、宗務科教員との対話を通して心の癒しを得ている生徒も多い。 イ 92%の生徒が学校行事として認識している。今年度本部参拝に参列した3年生と1年生に、「日々生かされている」「世のお役に立つ人間になる」ことへの意識喚起を促すことができた。感謝祭では参列した3年生全員が、感謝の気持ちをもって日々の学校生活を過ごす決意を新たにされた。
教育内容の充実改善〔コース検証・学力向上・生徒指導・進路指導〕	(1)コース内容の充実・検証 ア 特別進学(文理進学) イ エンカレッジ ウ ITライセンス エ アートアニメーション オ ライフクリエイティブ カ トップアスリート キ 課題を抱える生徒への対応	(1)コース内容の充実・検証 6つのコースを安定・充実させる。 ア 特別進学については、様々な学力向上施策を実施して内容の充実を図り、特別講習等の参加状況の増加に努める。 イ エンカレッジについては、具申書や高校生活カードの十分な活用、入学前面談や個別教育支援計画の作成等を丁寧に行い、生徒との会話や家庭との連携に力を入れる。基礎学力の補充と体験型授業で指導の充実を図る。 ウ ITライセンス・ エ アートアニメーション・ オ ライフクリエイティブについては、専門学校との連携を進め、内容を充実させる。 カ トップアスリートについては、7強化クラブの活動実績アップと学校生活の安定に努める。次年度募集を安定させる。 キ 課題を抱える生徒への対応に、教育支援部と生徒指導部を核として丁寧に取り組む。	ア 7時間目の授業や進学講習、長期休業中の特別講座や学習強化合宿を行い、基礎学力の向上や受験対策を行う。 イ エンカレッジの生徒の出席状況・進級を充実させる。 ウ ITライセンスでは情報関係の資格取得を目指し、進路に結びつける。 オ ライフクリエイティブ(スペシャリティクラス)を充実させる。専門学校との連携により、生徒の関心に応じた体験講座に力を入れる。 カ 強化クラブの実績アップと次年度募集を成功させる。女子バスケット1期生の立ち上げを安定させて、2期生募集につなげる。	ア 「特別進学」と名称を改め、文系に特化したカリキュラムに変更した。朝学習や放課後学習にも力を入れ、基礎学力の徹底を図った。2・3年生は文・理に分かれての授業を継続し、理系希望の生徒のための特別講座や受験指導にも力を入れた。夏の勉強合宿には1・2年生全員が参加し、級別の英検対策講座で合格率アップに努めた。また「個別学習計画書」を作成し、担任が学期ごとに成績や学習状況を記録することで大学進学に向けた計画的な学習指導を継続させていきたい。 イ エンカレッジコース開設3年目、「学びなおし」を募集のコンセプトに入れることで、入学者は前年度を上回った。入学前面談実施や個別教育支援計画の作成に力を入れ、担任・学年が中心となって粘り強い取り組みを実施し80%が進級することができた。3年生は26名中24名が進学した。 エ アートアニメーションコースは目的意識をはっきり持った生徒の確保につながり、1年生は2クラス編成で行った。3年生は美術系やイラスト・声優分野の大学、専門学校へ多く進学した。 オ ライフクリエイティブコースは協力校である辻学園、NRB日本理美容専門学校に多数進学した。今後もより強い連携を続けたい。他の講座の内容も精査し、安定した入学者の確保を図っていきたい。 カ トップアスリートコースは、柔道部が個人・団体で近畿大会に出場、また個人では全国大会出場が決定したが、大会は中止となった。女子ソフトボール、男子バスケットボール部は近畿大会に出場し、ともに大阪国体チームに選手を輩出した。女子バスケットボール部は創部1年目で大阪ベスト8入りを果たし、今後の成長が大いに期待できる。次年度の募集も安定が見込まれる。 キ エンカレッジコースの生徒への対応と同様、担任・学年は生徒の登校状況を把握し、早い段階で教育支援部等との連携で対応した。今後もケース会議や認定会議を通して、具体的な個別の支援策を迅速に打ち出せるよう連携を強めたい。また保護者との交流会(COCORO 食堂)も年間5回実施し、多くの保護者がその必要性を感じている。今後も内容を一層充実させて継続していきたい。

<p>(2) 基本的学力の向上</p> <p>ア 全生徒への基礎基本の徹底</p> <p>イ 学習意欲のある生徒へ特別対応</p> <p>ウ 研究授業の実施</p> <p>エ 生徒の授業評価</p>	<p>(2) 基本的学力の向上</p> <p>低学力の生徒が多い。在籍者全体の基礎学力底上げと、進学希望生徒の学力アップに努める。</p> <p>ア 基礎学力指導(HR)や学習方法の充実・工夫に力を入れる。</p> <p>ア 授業者への意識喚起と、管理職や学年部長による授業巡視を行う。</p> <p>イ 外部機関や人材を活用した学習場を質量ともに拡充する。</p> <p>ウ 授業改善や授業力向上に向けて精力的に取り組む。(研究授業・公開授業・研修等)</p> <p>エ 生徒による授業評価を授業改善に活かす。</p>	<p>ア 時間割に設定した「学びたいむ」、タブレット学習を充実させる。</p> <p>ア 「眠らせない」「授業に集中させる」授業を実施する。</p> <p>イ 時間割以外の学力向上の取り組みに対して満足度70%以上を目標にする。</p> <p>ウ 教諭・常勤講師を対象として各教科で研究授業を実施する。また公開授業を年間2回の期間を設けて実施する。</p> <p>エ 教諭・常勤講師全員が授業アンケートを行い、生徒による授業評価を分析する。</p>	<p>ア 「学びたいむ」では各学年・コースごとに「学びなおし」教材を工夫し、「基礎学力がついてきた」と答えた生徒が84%と前年度の66%より増えた。今後も3年間を見据えた取り組みを計画し、生徒が達成感を感じるような教材の選定や授業作りを継続させていく。また1・2年生でポートフォリオを取り入れた。高校生活の活動成果や学びを記録し、振り返りをさせることで、主体的に学ぶ姿勢を向上させていきたい。</p> <p>イ 放課後に実施した特別講習を受講した生徒の全員がその内容に満足している。また自学自習サポート教室(藤蔭塾)も大学生のアシスタントによるきめ細かなサポートのおかげで、生徒たちの学習意欲を高めることができた。塾講師による特別講習は受講する生徒の定着が年々難しいため、令和2年度は廃止とする。</p> <p>ウ 公開授業・研究授業の実施後に各教科で検証し、授業改善につなげた。今後も継続していきたい。</p> <p>エ アンケートで「授業はわかりやすく、工夫がされているか」との質問に89%の生徒が満足を感じている。しかし、科目別担当者によっては課題が残る授業評価もみられたので、アンケート結果を教科内で共有し、振り返りシートを使って教員一人一人の課題克服・授業改善につなげた。</p>
<p>(3) 生徒指導の充実</p> <p>ア 生活・学習習慣の確立</p> <p>イ 欠席者・遅刻者の改善</p> <p>ウ 挨拶・マナー等の徹底</p> <p>エ 生徒間のトラブルや、生徒指導案件の改善</p> <p>オ 人権侵害事象の根絶</p>	<p>(3) 生徒指導の充実</p> <p>ア 生活習慣・学習習慣や自尊感情の醸成に力を入れて、出席状況や授業態度の改善に取り組む。</p> <p>ア 転退学者数の改善を継続して行う。「3年間お預かりして育てる」「社会のよき構成員として世に送り出す」という使命感を大切にす。</p> <p>イ 学級経営の充実を図り、「欠席しない、遅刻しない」登校したくなる学級集団の構築に努める。</p> <p>ウ 登下校時、ホームルーム、授業開始・終了時の挨拶習慣化とともに、外来者に対する挨拶を励行させる。</p> <p>エ クラブ加入率を上げ、部活動を通して、集団での協調性・規範意識に対する向上心を育てる。</p> <p>オ 社会規範を理解させ、また高校生らしい対人関係を身に付けさせる。生徒間の人権侵害事象は起こさせない。</p>	<p>ア 転退学者数を減らす。(6%未満)</p> <p>イ 遅刻者を昨年度より減らす。</p> <p>イ 朝の立番指導を行い、始業時刻前後に登校する生徒に間に合おうとする意識を持たせる。</p> <p>ウ 望ましい服装・髪色・挨拶などのマナー指導を徹底する。</p> <p>オ 生徒指導案件を昨年度より減らす。</p> <p>オ 人権侵害事象はゼロを目指す。</p>	<p>ア 転学者数</p> <p>H28年度→53名(6.62%) 転学25 退学28</p> <p>H29年度→54名(6.67%) 転学21 退学33</p> <p>H30年度→48名(6.23%) 転学23 退学25</p> <p>R元年度→61名(7.43%) 転学34 退学27</p> <p>令和元年度の転退学者率は昨年より若干増加し7%台となった。転退学者の約64%は「不登校」を含む「学校生活学業不適応」や「進路変更」が理由である。入学者が昨年より増加したが、その多くが小学・中学時に家庭的、経済的、学習的に多くの課題を抱えている背景があることは否めない。アンケートで「生徒の心身の悩みに先生が丁寧に対応しているか」という質問には90%の生徒が肯定しているが、生活習慣未確立や学習習慣のない生徒の自尊感情の醸成にさらに力を入れ、出席状況や授業態度の改善に取り組むたい。</p> <p>イ 年間の遅刻者総数は在籍数比で昨年より若干増えた。遅刻者は翌日に早朝登校させるなど、学年や生徒指導部が中心となって今後も継続的かつ粘り強い指導を続けていく。</p> <p>ウ 90%を超える生徒が「ルールを守り、挨拶もきちんと行っている」と答えている。いろいろな場面での挨拶指導が浸透してきている。さらに徹底した指導を継続していきたい。</p> <p>オ 最近増えているSNSの不適切な使用による事案があり、全体の生徒指導件数は41件で、昨年より微増した。HRや学年集会で今後も注意を呼び掛け、事案を未然に防ぐよう継続して指導していく。人権侵害事象はゼロであった。</p>
<p>(4) 進路指導の充実</p> <p>ア 進学実績の向上</p> <p>イ 望む職業への就労実現</p>	<p>(4) 進路指導の充実</p> <p>ア 大学・短大・専門系学校への進学実績を向上させる。</p> <p>イ 卒業段階での未進学者・未就労者の数を減らす。</p>	<p>ア 大学・短大・専門系学校全体の進学者を前年度よりアップさせる。</p> <p>ア 四年制大学進学率も前年度よりアップさせる。</p> <p>イ 未進学・未就労率を0にする。</p>	<p>ア 全体の進学率は平成30年度の70%から76%へと上がったが、大学進学率は昨年度の34.6%から33.9%へと微減し、専門学校の割合が増加した。</p> <p>イ 進学希望者の中での未決定率は浪人希望を含め1.7%、就職希望者の中での未決定率も0.4%で、昨年度より下がった。進路未決定者0を目指し、今後も粘り強い進路指導を継続していきたい。</p>

学校組織体制の改善	(1)学校組織の活性化	(1)学校組織の活性化 ア 組織的・機動的な学校体制の確立と経営 教科指導やクラブ指導には専門性が必要、学年や分掌組織は組織力・機動力・実行力が必要である。それぞれが、連携を密に活発な業務活動を展開する。 イ 熟慮判断を旨とするが、ネットワークとスピード感を持った業務展開をして、生徒と触れ合う時間を確保する。	ア 準専任教員・常勤講師の任用試験を厳密に実施する。また適性を配慮した人事配置を行う。 イ 教諭・常勤講師と様々な場面で時間をかけた対話を行う。	ア 今年度、準専任教員選考には3名の常勤講師が臨んだが、任用には至らなかった。常勤講師は任期満了者に代わり、新規に14名を採用した。生徒の学習指導や教育活動に熱心に取り組む教員の採用に今後も全力を尽くす。 ア 校務分掌は担当教科や本人の適性を考慮して配置をした。「教職員の適性・能力に応じた校内人事や校内分掌が行われているか」について、アンケートでは78%の教職員が肯定している。なお平成27年度から教務学事系4部、総務企画系3部の計7部で丁寧・正確な業務運営を展開したが、業務分担を見直し、より機能的・機動的に業務運営できるよう、次年度より4部体制とする。 (教育支援部は教務部に、研究研修部は進路部に、入試広報部は総務部にそれぞれ統合する)
	(2)組織と業務を通じた人材育成	(2)組織と業務を通じた人材育成 ア 管理職や分掌組織の組織的業務を通してミドルリーダーを育成する。 イ 課題山積の学校である。様々な学校課題を提示して、課題解決型の業務を展開し、学年部長・分掌部長等を活かして、OJTで育てる。 ウ 大阪府教育庁や大阪私立中学校高等学校連合会、私学マネジメント協会等が主催する研修会を積極的に活用する。	ア 管理職や校務運営委員会メンバーを含めてミドルリーダーの層を厚くする取り組みを行う。 イ 学年部長・分掌部長に企画提案型で業務を遂行させる。 イ 重要な学校課題を提示して、課題発掘・解決型の業務を実践させる。 ウ 私学は教員の研修機会が少ない。人材育成の観点で、研究研修部を通じて外部研修会等へ積極的に出席させる。	ア 7部での仕事を学校全体として機能させる分掌長、副分掌長を配置し、教頭補佐(分掌長兼務)を学校運営の要を担う人材として育成した。 イ 新任の常勤講師対象の研修を充実させ、学年部長や分掌長が中心となり学級経営、生活・学習、学校業務に関する細かい指導を行った。ミドルリーダーはまた日々の業務から重要かつ、最優先の学校課題を見つけ出し、速やかに改善策を考え実践するよう努めた。教員の83%がその取り組みを認識している。また研究研修部が様々な校内・校外研修を提示し、若手教員も積極的にそれに参加し、自己研鑽力を高めている。
広報募集活動の充実強化	(1)広報募集の強化 ア 組織的な広報展開 イ 外部広報のアピール力アップ ウ 入学生徒の確保	(1)広報募集の強化 ア 入試広報部の組織的な広報展開 イ 外部広報のアピール力アップ 生徒・保護者・中学校・塾等に受け止めやすく、わかりやすいように改善する。 ウ 入学生徒の確保 令和2年度入学者を安定して確保する。本校を対象とする生徒層を本校の「学校体制」と「教育内容」で丁寧に3年間育て上げるということで、生徒・保護者・中学校・塾等の外部評価を得る。	ア 中学校長経験者4名の人材を活かした広報展開を行う。 イ 利用しやすいホームページ、わかりやすい学校案内にさらに改善を加える。 イ 広報媒体の完成・配付時期を大幅に早める。 ウ 令和2年度に平成31年度(令和元年度)並みの入学者を確保する。	ア 中学生・保護者対象のオープンスクールを3回、入試説明会を4回、中学校教員や塾向けの説明会もそれぞれ実施した。学校紹介DVDや各コースの体験授業にも改良を加え、参加者は昨年度より増加した。 イ 学校案内冊子の発行を早め、中学校への速やかな広報活動を開始した。ホームページは中学生や保護者によりわかりやすい内容にし、学校行事等もタイムリーにアップするよう努めた。 ウ 「エンカレッジコース」は不登校生徒に限定せず、広く「学びなおし」を必要とする生徒にも募集を広げ、外部に積極的にアピールすることで入学者が大幅に増え、3クラス編成とした。ライフクリエイティブコースも昨年度に比べて大幅に増加した。その結果、平成25年度以来300名を超えることがなかった入学者数は、令和元年度は329名と前年度を大きく上回り、令和2年度も357名が確定した。今後も安定した入学者確保を目指したい。
	創立一〇〇周年に向けて	(1)問題解決型、未来志向型の学校風土の醸成	(1)大局観による未来志向型の学校風土 7年先に向けて連帯して問題解決にあたる、一体感のある学校風土を醸成する。	様々な学校課題に連帯感をもって、前向きに取り組む、学校の一体感を醸成する。